

「第2回『原発と人権』全国研究・交流集会 in 福島」実行委員会準備会第2回企画
原発輸出と脱原発国際ネットワーク 報告

2013年9月2日（月曜日）、午後6時15分より、東京・霞ヶ関の第2東京弁護士会10階会議室で、「第2回『原発と人権』全国研究・交流集会 in 福島」実行委員会準備会による第2回企画として、「原発輸出と脱原発国際ネットワーク」との表題のもとで、次のような学習会が開かれました。当日は、日本ジャーナリスト会議の丸山重威さんの司会のもと、反核法律家協会の大久保賢一さんの開会あいさつにつづいて、前半は、ジャーナリストで日本ジャーナリスト会議の中村梧郎さんによる「原発輸出とその危険」と題したお話がありました。後半は、映像作家で日本国際法律家協会の高部優子さんから「原発廃止・米軍基地撤去をしたフィリピン」のタイトルでの映像の紹介と、フィリピンから、現在、日本に長期滞在している、移民問題に関する国際 NGO で活動をしているルイシト・ブッチ・ポンゴスさんによる「原発廃止させたフィリピンの運動と国際ネットワーク」との報告がありました。とても内容の豊かな、非常に充実した学習会となりました。

以下、簡単に内容を紹介します。まず、中村梧郎さんのお話は、ご自身が撮影された写真をはじめ、豊富な写真・資料をもとに、福島の状態を非常に生々しく、リアルに説明され、このような状態で輸出は果たして可能なのかを問いかけられた。目下、日本政府は、事故を経験したことをセールスポイントしているようではあるが、そもそも原発の輸出は、技術を維持するという側面があり、そこに（多国籍）企業や関係国政府などからなる、技術的利用のための複合体、国際的な原子力のネットワークが形成されていることを、世界の原発の実情をふまえて指摘された。原子力技術は、現在、さまざまな問題を抱えており、明確な展望を描くことはきわめて難しい状況にある。日本がそれを放棄すれば輸出、つまり原発技術の拡散も、困難となるだろう。ここで、脱原発にむけての国際的な連携が必要となってくる。このあたりで、前回の伴さんの話ともつながってくるだろう。最後に、輸出の対象となっている東南アジアにおける成長神話や、豊かさへの問いなおしという事柄が大変重要であるだろうということで、話を終えられました。

次のフィリピンについての二つの報告は、こうした脱原発の国際的な連携、ネットワークが、原子力技術の国際的な拡散に対峙していくために、とても大切であることを示してくれました。最初に、完成してから25年以上にわたって稼働させず、凍結をさせ続けているバターン原発の現状と、そのためにつながる人びとのネットワークが映像で紹介されました。それを受けて、このネットワークがどのように形成され、それがフィリピンでの民主主義を求める活動や、平和、自由、そして核兵器を廃絶する運動と結びついているのが解説されました。バターン原発は、アメリカによる支配、コントロールの象徴であり、フィリピンの人たちにはほとんど恩恵のないものとの、ブッチ・ポンゴスさんの言葉がとても印象に残りました。フィリピンでの経験は、日本でも、そして国際的にも、原子力に依存しない、脱原発の方向性を考えるうえで、とても示唆に満ちていたと思います。

おわりに、非常に簡単なまとめをかねて、日本科学者会議・北村の方から、閉会のあいさつをもって、終了となりました。質疑応答も活発になされ、たくさんの知見を得ることができたのと同時に、大いに啓発され、そしてまた大変勇気づけられた学習会ではなかったかと思います。これを来年4月に、福島で予定されている、第2回の「原発と人権」全国研究・交流集会へとつなげていく必要があるのではないのでしょうか。さらには、こうした学びの成果を、研究と交流に反映させ、原発災害からの被害者の救済と、原発にたよらない、脱原発の展望へと広げていくための大切な機会であったのではないかと思います。

報告・北村 浩／日本科学者会議